

# IP化など新時代の 放送技術発展に向けた NHKが果たすべき役割

放送サービスにおいて、コンテンツと技術は両輪。コンテンツの制作を支えつつ、放送方式やシステム、ディスプレイの開発に至るまでさまざまな角度から放送文化の発展を支えてきたのが、NHKの技術部門だ。IP化やリモート制作のニーズ拡大など、コロナ禍で次世代放送技術への切り替えが求められる中、NHKは時代の変革にどう立ち向かい、どうリードしていくのか。4月25日に理事・技師長に就任した児玉圭司氏に聞いた。

(構成:高瀬徹朗・編集部ライター、写真:広瀬まり)



## 経験から肝に銘じたこと

—— 技師長就任までを振り返り、最も印象に残ることから聞かせてください。

**児玉** 失敗したことはなかなか忘れないものです。1994年リレハンメル冬季五輪でBS1の放送がダウンしたことがあり、これ自体は放送衛星のトラブルが原因でしたが、家に帰ったら家族からBS1が停波していると聞かされ、すぐに電話をしました。すると「電話してくる時間があるなら、すぐに来い」と一喝されました。実際、現場が復旧対応に追われる中、その手を煩わせるような電話をかけたのは、自分の甘さだと気づかされた瞬間でした。すぐに現場へ駆けつける——このことが忘れてはならない教訓として刻まれています。

—— 地上デジタル放送移行時はどうされてきましたか。

**児玉** 地上デジタル放送立ち上げの段階では直接タッチしていませんでしたが、本格的な移行作業が始まった2006年に技術局へ戻ってからは、中継局の整備を中心に関わりを持

ちました。担当地区の整備内容を取りまとめる立場で、放送のネットワーク回線設計から局舎・鉄塔の整備まで調整しました。また移行後には、全国地上デジタル放送推進協議会で難視対策にも関わりました。地デジ移行という「世紀の大事業」に少しでも貢献できたことは、とても印象深い経験でした。

## 理事・技師長としての自らの役割

—— 技術陣を代表する理事としての役割をどう考えていますか。

**児玉** 理事は経営全般に責任を持つ立場ですから、「NHK経営計画(2021~2023年度)」で掲げている「スリムで強靱なNHK」を構築すべく、スピード感を持って改革に取り組んでいきます。放送設備のあり方をはじめ、営業改革、人事制度改革、グループ経営改革などNHK全体にまたがる改革においても、技術的な見も踏まえて取り組んでいきたいと思えます。

—— 技術部門のトップとして、具体的にどういった考えですか。

**児玉** 放送設備など保有資産の圧縮や、システム面を含めた運用の簡素化・スリム化を進めていく一方、これまでと同様、放送技術の発展を先導していく役割がNHKにはあると考えています。「放送は技術を活用した文化」と言われますが、視聴者・国民の役に立つ、文化の向上に資する技術を作り出して普及させていくことです。受信料という公的負担金で成り立つ存在として、技術を通じた文化への貢献という役割は、これからも果たしていきたいと考えています。

—— 今年は「技研公開」がオンラインで開催されました。

**児玉** 放送技術研究所(技研)は、放送メディアに特化した研究所として国内外から注目されていますので、コロナ禍でもオンラインという形で研究成果を披露することができたのは良かったと思います。今回は、放送文化研究所と共同で取り組む新たな研究領域も紹介しています。また、研究所で10~20年後を見据えた研究開発を進める一方、制作や中継・送りの現場から創意工夫に基づいた改善・